

## 清規の研究

大石守雄

## 叢林拾遺について

叢林拾遺三卷二冊は、建仁寺塔頭兩足院藏の筆寫本にて、東漸健易（一三四三）一四三三の著書で一名、東漸略清規、叢林拾遺略清規<sup>(1)</sup>、東漸清規とも呼ばれている。

叢林拾遺三卷について、先づ目次をあげてみるに、

卷一には、佛降誕。佛成道。佛涅槃。達摩諱。開山忌。嗣祖師忌。歷代前住。土地火德。四節別式。結制。啓建楞嚴會。戒臘牌。解制。滿散楞嚴會。施餓鬼。冬至。四節通禮。衆寮特爲湯。土地堂念誦。庫司特爲湯。開山諷經。小參。五更禮儀。

卷二には、祝聖諷經。赴寢堂。上堂。巡堂。方丈特爲湯。乘拂禮儀。列職交替。兩序進退。待者進退。雜務進退。大小掛塔。勤奮參暇。衆僧掛塔。

卷三には、月中須知。請寮主。朝望上堂。五參上堂。

三八念誦。臨時行事。普說。祈禱。住持出入。坐禪（坐參、放參）。入院儀式、東堂西堂式、送亡式、前住遷化式。附大鑑禪師小清規。

とある。勅修百丈清規の如く組織化されたものではなく所謂叢林の拾遺として残されたものである。ところで此の書物の成立年代であるが、跋文・序文などは無く、成立年代さえ明記してないのである。故に文中より推量する以外にない。卷一の戒臘牌の頃に、

但寮元牌十三日衆寮諷經掛之不下不書知事名稱檀林無雜樹薺葡林無餘香也。

とあるところから、薺葡林とは南禪寺十境の一である衆寮のことで、現在の南禪寺専門道場がこれにあたる。つまり東漸健易の南禪寺住世は應永十七年（一四一〇）八月十九日であり、後天授庵の事を管し、又南禪寺塔頭輝庵を翫めて退休の處とした。南禪寺在世中の作である

こと。應永十七年（一四一〇）と應永三十年（一四三二）年代のものとするべきであらう。

本文を見ると、勅修百丈清規に對する批判的な態度が見られる。

今時大方依勅修清規掛眞字安肖像故無此禮可借念誦一切略不知有據（達摩諱の行者調經の項）

愚謂校勅修規無此禮蓋禮則以不參差爲妙故東西序放進旅退中矩中規故有此禮耳（上堂の項）

愚按宋南渡以前如楊岐會受雲蓋詣於興化寺開堂雲峰悅赴翠岩命在上藍開堂等是也若大惠□徑山至臨安開堂於明度與則雖南渡後猶在別寺開堂其合爲一蓋大惠以後儀也見禪苑及校定清規（入院儀式の項）

とある如く、勅修百丈清規は文和五年（一二三六）に日本に於て刊行されたわけで、その後中巖圓月を始めとして義堂周信、雲章一慶などの人々によつて講義提唱が行はれた。當時代には清規關係では中巖圓月の講義の影響による勅修百丈規抄の類が、義堂鈔・桃源抄など多いが、これ等は勅修百丈清規を解釋しているのに止まつて居り、特に東漸健易は中巖圓月。義堂周信の影響ありと云はれながらも、叢林拾遺においては勅修百丈清規に對して批判的なものがある。つまり處々に惟勉規（叢林校定清規總要）云、澤山規（又は備用規〓禪林備用清

規）云。なる引用文があることは、此等の清規が勅修百丈清規が日本に來る以前は實施されていたことであり、勅修百丈清規を、それ以前と比較検討すると共に、更に愚謂便是日本榜樣手並不載古現（秉拂禮儀の項）とある如く、日本古來の法儀を再検討しようとする態度が叢林拾遺の特色とするところであらう。

また、三卷末に大鑑禪師小清規を附録として収録している様に、清拙正澄の法儀を取上げている。

或諸山禮在知事前清拙和尚爲準次上堂行者搥鼓如常兩班之定云々（入院儀式）

清拙和尚住南禪時後堂勤舊假作專使先使出至住持前挿香兩展觸禮勅誓盛整度與勅使勅使進度住持接待同法座讀了後度專使專使接待安卓上次山門疏等皆專使度住持住持薰爐法語了專使接待付行者二人持至頭首前頭首不動本位而讀之（入院儀式の末）

とある。大鑑清拙の南禪入寺の例をあげている。清拙の南禪寺入寺は建武三年（一二三六）十一月にて、大鑑清規の新住持入院や開堂祝聖には規範的に錄されているだけで、この様に具體的な例があげてあるのは珍しいものである。大鑑清規は叢林拾遺と共通点があるのは、惟勉清規や備用清規を引用して、日本古來の錯習されている儀式を正しいものにしよとする意図がある。ただ大鑑

清拙の頃は勅修百丈清規は成立しておらず、勅修百丈清規を批判しているのは東漸健易の特異なものと見るべきであらう。更に勅修百丈清規は禪苑清規や禪林備用清規叢林校定清規などを會粹參同して作成されたところよりその取捨選擇したことに對して痛烈な批判を加えたことにもなる。

更に、送亡式つまり亡僧の項について、中國の清規に記されているものうち、日本では行はれていないものがある。それをあげている。

凡喪主須老成宿德圓悟爲開福寧主喪宏智作書遺大惠禪師屬以後事晦堂祖心入滅命門人黃遲堅主後事豈可忽乎喪主一々請諸佛事、入龕（日本未構之）。鎖龕。學哀。

奠茶。奠湯（茶湯不拘時節）。對靈小參（物故之夜謂之大夜又曰迨夜蓋宿夜也）。起龕。秉炬。安骨。起骨（以綿子覆之）。入塔（鳴鼓鉦）。撒土（日本未構之或云合未錢土三物撒之地上）。入塔（或坵土以蓋盛土侍者捧之）。祭文（不拘時節爲師爲又則倒讀可也）。日本無秉炬（炬乃如蓮華刻木朱其色蓋形火諸人轉而互用之）。

とある。中國の亡僧葬儀の様式に簡略化が見られるのではないか、つづいて重要なことは俗人の葬儀の様式が清規の上にはあらはれた最初ではないかと思はれるものがある。その様式を對比するために僧俗二つにわけてあげる

と。



とある。俗人の葬儀については、勿論禪宗の歸依者、居士とか大姉であるが、清規の上ので取上げられていなかったが、恐らく亡僧様式に準じたのであろう。

東漸健易の行狀は、續羣書類從（第九輯下・傳部）。本朝高僧傳（卷三九）。延寶傳燈錄（卷一四）などの東漸健易傳によると。

興國四年（一三四三）遺州に生れ、（續羣書類從は京兆の人となつてゐる）姓は藤原氏にして、母が一夕龍石の徵を夢みて孕んだが故に幼名を龍石子といつた。正平七年（一三五〇）七才にして、東福寺の華峰僧一について得度し、具足戒を受けた。佛教書。儒書その他の書物を精讀すると共に修行も怠ることなく。師華峰僧一の寂後偏く諸禪刹を行脚して歸り、建長寺の石室善玖（一二九四

一三八九)の會下に典賓となり、又相國寺に入つては首座となつた。明徳年間(一三九〇~一三九二)に遠江の華藏寺、攝津の廣嚴寺、備中の瑞光寺などに歴住し、また京都の安國寺に住したときの様子を岐陽方秀(一三六三~一四二四)の手紙によつて知ることが出来る。

(上略)豫法兄東漸西堂同門之老也。解廣嚴印以來、寄餅錫於相國寺。去十八日領相帖還京安國寺、開堂已擇明初五日。以彼寺之能文者。上首知事就豫。求足下山門疏語。東漸亦要得足下高文。以爲我榮。敢告留一兩日之暇。以垂寵賜。則何幸如之。相足下訓導學者。日夕懇々。不當有此煩裏。但特舊眷。以忘罪戾也(下略)<sup>(8)</sup>

と、五山文學のはなやかなりし當時、行學にすぐれてゐたことを岐陽方秀は推賞している。更に東福寺六七世として入寺し、南禪寺にも七三世として開堂し、大將軍足利義持は、しばしばその法筵に列席している。

應永三十年(一四三二)四月、常光在寺に退隱して病氣となり療養しているとき、示寂する三日前に大將軍足利義持が見舞に來ると、待者に法鼓を打たしめて上堂して(上略)山僧入此門、己經七十三年、薙髮於此、老成於此、今正欲示歸就之處、大相公遺識歸就處、擧拂子曰一毛頭上定乾坤(下略)<sup>(4)</sup>

と、また示寂の前日十六日には

(上略)源公遣使求法語、易便上堂、辭衆下座。書其提唱之語以進之(下略)<sup>(6)</sup>

と、最後迄禪門の生命であり、最も大切な法儀である、上堂を怠らない東漸健易の態度は、如法綿密な人柄であると共に死の直前迄實踐しようとする迫力に感歎するものである。四月十七日に端坐し、遺偈を「威音一箭、脚頭脚尾、日月月面」と書して示寂したのである。このことについて本朝高僧傳の著者萬元師蠻は次の如く激賞している。

東漸師年登八衷。病中陞堂。示衆書。以應源不相之需。而翌日遂唱大寂滅。其遊戲三昧綽有餘裕。始知平日之言語文章悉皆爲實焉。今時和明之僧。依物觸途。漫弄筆墨而及其死期。手脚忙亂。不得敢使一字。然則其平日之言語文章皆悉僞也己。嗚乎天理人欲同事異行。到此不能正。則迷悟公私何以別之。

とある。東漸はまた詩文もよくし、早くより義堂周信(一三二五~一三八八)などの教をうけて一家をなしていた。歸寂の後南禪寺の回輝庵に搭し、諸會語錄を集めて、龍石藁一卷が東福寺一華院に現藏している。

註(1) 禪籍目錄によれば妙心寺東海庵に無著道忠筆寫の叢林拾貴略清規東漸健易著がある。

- (2) 石室善玖は應安元年（一三六八）建長寺入寺  
 (3) 續羣書類從第九輯下  
 (4) 續羣書類從第九輯下  
 (5) 易とは東漸健易のこと  
 (6) 延寶傳燈錄卷十四  
 (7) 一華院の開創は通叟至休にして東漸健易との關係は「通叟至休—華峰僧—東漸健易」と法系が次第して、東漸健易は一時一華院に住持していた。

### 庸峭餘録について

無著道忠撰述の書物に庸峭餘録卷五、目錄一なるものがある。卷末の奥書によると、

勅修清規舊鈔、其解本規者、左觸取之、其解名色者、象器箋撰入、不可收此二書、錄之名庸峭餘録、稟本委棄、累歲不遑治定、享保十年乙巳七月廿五月初涉筆、至十月八日脫稟。七十三翁無著忠識

とある。無著道忠は、勅修百丈清規を解釋したとき、本文の訓古註釋書としては勅修百丈清規左觸二十二卷（享保三年六十六歳のときなる）がある。又清規の中で固有名詞を取上げて辭典としたものには禪林象器箋二十卷（正徳五年六十三歳のときなる）がある。ところが此の二書に収めることが出来ないものがあり、これを収録し

て作つたものを庸峭餘録と名付け。無著七十三歳のときの享保十年（一七二五）七月廿五日に筆を取り初めて十月八日に脱稿している。つまり七十六日間で完成したものである。また庸峭餘録の序文によると

豫會說勅修清規、而著左觸數函、其間有不可交說者、卽別製此書、題名庸峭餘録、宋祈筆記云、齊魏間、以人有儀矩可喜者、謂之庸峭、齊東野語詳解

とある。庸峭と名付けた意義を述べている。その目錄をあげてみると、

卷一には、朝制。接官。請謝。入院。退院。開堂。上堂。小參。乘拂。普說。入室。拈香。

卷二には、唱佛。祝聖。念誦。諷經。看經。聲明。坐禪。得度。戒檢。威儀。班位。住持進退。進退。燒香。跪爐。

卷三には、禮數。禮拜。問訊。坐起。入浴。上廁。作務。兩序。知事。頭首。待者。行者。稱呼。殿堂。唄器。鐘。

卷四には、更點。鼓。版。槌。磬鈴。像設。牌銘。疏榜。回向。印封。文牒。書式。莊飾。

卷五には、服章。喫施。錢別。祭供。茶湯。煎點。喫食。會齋。三佛會。祖忌。國忌。入牌。送喪。施食法。薦亡。黃檗山萬福寺慈悲水懺請位。

## 附録 堂規。

である。堂規の末に「右堂規唐僧手迹在龍華、蓋黃檗山所行者」とある。黃檗宗の禪堂のことであろう。

次に庸峭餘録の援書目録を作つたが、その分類方法は色々あらうが、禪林象器箋に従つて作つた。

## 内典。1、經疏部

華嚴經。華嚴經探玄記。梵綱經。梵綱經疏。圓覺經。

首楞嚴經。維摩經三註。大般若經。摩訶般若心經。法華經。大威德消災陀羅尼。大寶積經。中阿含經。正法

念處經。三千威儀經。勝天王般若經。佛本行集經。

## 2、律部

十誦律。四分律。五分律。摩訶僧祇律。摩得勒伽。善

見毘婆沙律。

## 3、論部

瑜伽師地論。

## 4、中國日本撰出佛敎書關係

法苑珠林、祇園圖經、釋氏要覽、釋門歸敬義、南山增輝地、行事鈔、資持記、六物圖、出要律義、淨土指歸集、律曆志、四河入海、別受八齋戒法。

## 5、僧史關係

唐高僧傳、釋門正統、編年通論、元亨釋書。

## 6、禪史關係

景德傳燈錄、朕燈會要、禪林僧寶傳、五家正宗贊、正燈錄。

## 7、行狀關係

海藏虎關紀年錄、建仁顯令和尙入寺記。

## 8、禪集關係

碧巖集、永平正法眼藏、羣玉集、禪林實訓、人天寶鑑雪堂拾遺錄、雲臥紀談、叢林盛事、竹窓二筆、紙衣騰無住雜談集、義堂日工集、臥雲日件錄、宗門雜錄、祖庭事苑、東福繼禮、東福雜記、石溪雜錄、因果錄、不二鈔。

## 9、清規關係

右清規、禪苑清規、校定清規、備用清規、勅修清規、勅修清規雲桃鈔、月用清規、月用清規解、月用規範、幻住庵清規、大鑑清規、村寺清規、永平清規、東漸略清規、南禪規式、天龍年中行事、東福清規、教苑清規律苑清規。

## 10、禪錄

趙州諗錄、玄沙備廣錄、大隋眞錄、雪竇顯錄、興化獎錄、雲峰悅錄、大慧普說、普庵肅錄、癡絕冲錄、虛堂惠錄、無學中國眞如錄、約翁儉錄、竺仙仙錄、清拙澄錄、夢窓石錄、虛舟度徑山錄、無象錄、蒙山錄、中巖月錄、義堂信錄、見桃錄、慧林錄、海會語錄。

## 11、禪文關係

物初賸語、禪儀外交、別源南游集、因師集賢錄、禪文格。

## 外典 12、經部

尙書、論語、禮記、毛詩、杜詩。

## 13、史部

史記、宋史、通鑑綱目、隋史遺文。

## 14、集部

柳河東集、韓昌黎集、東坡詩集、東坡詩集、文體明辨

## 翰墨大全。

## 15、禪部

宋祁筆記、夢溪筆談、齊東野語、容齋三筆孔子家語、

堯山堂外紀、朱子語錄、皇朝類苑、徐氏筆精、三才圖

會、文獻通考、韻語陽秋、居家必用、事物紀原、經國

大典註解、小補韻會、字彙、焦氏類林、遊客日記、醉

菩提、趙氏蓮城、清訓拾要、水滸傳、五百問、句解、

曲禮、梨窓隨筆、古迹記、正字通、太平記。

と、以上の分類が出来る。援書一七九部に及び博學強覽

とはこの事であらう。

註(1) 無著道忠については、飯田利行氏「學聖無著道忠」(昭

和十七年十一月發行青梧堂刊)。松本文三郎氏「先徳の

芳躅」三二二頁(昭和十九年十一月發行創元社刊)など

にある。

(2) 蒲峭(ホシヨウ)とは諸橋漢和大辭典によれば人の手本

となる者。又屋勢の曲折あるもの、波峭。(湘煙錄)北齊

魏收謂蒲峭難爲齊魏間人之有儀矩可喜有則謂之蒲

峭、今造屋勢有一曲折者句蒲峭、俗又俗又轉語爲波峭。

(3) 蒲峭餘錄卷六(目錄を含む)は建仁寺兩足院藏本を見せ

て頂いたものである。

(4) 宋祁は宋安陸の人、字は子京、諡は景文、兄の庠と同じ

く進士に擧げられ二宋と呼ばれた。龍圖閣學士、史館修

撰となり、歐陽修と共に唐書を修む。後工部尙書翰林學

士承旨に至る。著書に宋景文集、益部万物略、筆記があ

る。(宋史二八四)(宋史新論八六)(東都事略六五)

(5) 齊東野語二十二卷。宋周密撰、この書物は南宋の舊事を

録し、録するところは往往宋史の闕を補うに足るもので

考證古義皆極めて典核である。(四庫提要子雜家類)